

妻を介護した夫

き様の語り

妻は脳梗塞で一、二年通っていたら主治医の方から介護保険の利用を進められた。その理由は介護者の負担の軽減。介護度は二だった。現在は入居者九人のグループホームに入所していて毎月約十五から六万前後、冬は暖房費がこれに加算される。デイサービスが包括されていて、三食のサービス付き。簡単な家事、例えば拭き掃除や食器さげや食器洗いを手伝っている。私も週に一度そこに行って手伝いをしている。普段は自分で歩く事が出来るが外出時は車イスを使っている。孫の結婚式にも車イスで出席した。

グループホームに入る前は、脳梗塞で入院し身体的な障害は残らなかったが、この時認知症も発症し、一年間ほど病院に通院していた。主治医から介護保険の利用を進められた。その理由は介護者の負担の軽減だった。ケアマネージャーが家に来て、介護度を二だと評価してくれて、週に三回グループホームに行くようになり、費用は二万円ぐらいだった。玄関まで迎えに来てくれ、朝九時から四時までサービスを受けていた。ケアマネージャーは月に一回来てくれて、ケアに関する計画表などを作成してくれる。特別養護老人ホームは要介護度が高くないと入れないと聞いたが、妻は二箇所も申し込んでみた。八十人待ちだと言われ、あきらめた。

発症からグループホームに入所するまで三年間ぐらい、介護は私が一人で行っていたが、娘が専門家のため、月に一回は来てくれて色々教えてくれた。あまり在宅で介護しているという感じはなかったし、それほど大変でもなかった。介護する以前は料理をしたことはなかったが、配食サービスなどは受けず

に療養が始まると私が料理をするようになった。妻も簡単な家事の手伝いはしてくれた。電磁調理器なので安全だった。料理は結構楽しくて苦ではなかった。妻の薬の管理も行った。しかし妻にお金を持たずとんでも買ってしまうし、お金が盗まれたと勘違いもする。姉妹にあげた着物についても、あげたことを覚えていなかったりした。ただ私が気付かない間に妻が勝手に家を出て行ってしまい、夜十二時過ぎにインターホンが鳴ると、警官に連れられた妻がいたりした。施設に入れたので心配がなくなった。このグループホームは認知症対応型なので少し高いが、できたばかりなのでとてもきれいだ。家具類は大体リースで対応している。ケアワーカーの方が常駐しており、個人病院と提携していて往診もしてくれる。看取りまでしてくれる施設だが、終末期医療やターミナルケアになった場合の細かいことまでは聞かれていない。毎月「便り」を送ってきてくれる。もし、私が先にいくことになったら妻には成人後見人などを選定してもらうことになるだろう。詳細についてはまだ決めていないし、遺書も書いていない。後のことは子供たちで何とかしてほしい。

妻を介護した夫

く様の語り

現在水曜日に一時間生活援助の人がきてくれて、茶の間、トイレ、お風呂(二週に一回)、自室、玄関を掃除してくれる。一月一二七五円。妻を自宅で介護していた時は身体看護もやってもらっていた。それは週2回で二四五二円と安かった。

今、自分是要支援一で、処方してもらっているのは睡眠薬、腰痛の飲み薬と湿布、腰痛はすべり症でブロック注射とかを打ってもらっている。妻を介護していた時はまだ自分は介護保険を受けていなかった。

た。妻が亡くなってここの一年でこのような状況である。

妻の介護を私がするようにになったのは私が面倒をみるといったから。近所のクリニックの先生が往診をしてくれていたのでも自宅療養をしていたが、妻に少しでも楽をさせたくて入院させ、その病院で肺炎で亡くなった。在宅で看取りをと思っていたのに、まわりの方たちから入院を勧められた。

介護の時は車で妻を病院に連れて行っていた。また入院中も、何があるかわからないのでもちろん車を離さなかったが、亡くなってからは、免許を返した。今は車を運転できる人に手伝ってもらって買い物をしているが、車がないと本当に不便である。ホームセンターまでは家から歩いて十分ぐらい、整形外科は7、8分である。

妻は歩くことに手助けが必要だったので、老人クラブに行く時は車いすで行った。妻には毎日一時間介護の人が来てくれていたし、クリニックの医師の往診も月一回あった。訪問看護師は週一回の時もあればそうではない時もあったが、在宅での最期の半年は毎日来てくれた。認知症のケアは以前のほうが大変だった。友人の女性に反抗心や嫉妬心などを抱いて、包丁をもって出かけていったこともあり、あわてて追いかけた。靴をそろえておいたのに、朝にはぐちゃぐちゃになっていたり。夜間に徘徊があったのだと思う。歩けなくなつてからはそういったことはなくなった。

一人で介護していた時に一番大変だったのは精神的なこと。誰にも相談はしなかったし、誰に相談すればいいのかもわからなかった。認知症のこともよく知らなかった。

勤め先は昔の国鉄、退職後の職場に勤めていた時に妻が発症した。五九歳の時に働いていた(高速のインターン)健康検査で、肝硬変が分かり入院した。結局は十年近く面倒を見ていたことになるが、最期三年間が在宅療養で最初の時の介護度は一か二だった。入院した時は毎日会いに行っていた。